

事も行き届いているが、市内の道路が非常に悪く、電車線の舗装も壊れ、交通の妨げになっていた。従って私たちの作業もこのような道路の補修や水道工事、街の美化清掃が主であった。幸いウラジオ市民はシベリア奥地で働くロシア人と違い、人種的な偏見はなく、教養、性格面において相当の差異が認められた。

約一か月たってようやく帰国できることになり、帰還者全員が収容所前に集合、ウラジオ市長よりあふれるばかりの激励を受けたとき、これまでの苦痛はすっ飛んで、ソ同盟万歳と拍手を送らずにはいられなかった。

昭和二十二年十一月十四日十七時三十分、舞鶴から私を乗せた列車がしずしずと金沢駅に到着、四年ぶりに母と対面できた記念すべき時刻であったのである。

最後に遠くシベリアの土地に身を埋め、あわれ永遠帰らぬ幾多の同胞に対し、心から哀悼の意を捧げ、このささやかな記録を閉じる。

悪夢

栃木県 黒川 護

シベリアに強制的に連行された我々を待ち受けていたのは、かつて想像もしていなかった寒気と、一方的に押しつけられた強制重労働であった。送られた場所が一体どの辺なのか。ハバロフスクまでは大体わかっていたが、その先はさっぱり未知の世界であった。

でも、昭和二十年の十一月に入ソし、翌年の雪が消え一面が緑におおわれ、名も知らぬ花が咲き出すころになって、現在地がどの辺か大体わかってきた。つまり、ハバロフスクから約二百キロくらい北上したところの街がコムソモリスク（我々はここで汽車よりおりて、そこから自動車に乗せられて北上）で、ここを起点として、シベリアのど真ん中を北西に向かって走り、バイカル湖の北辺を通って、やがてシベリア鉄道と連結する。こういう鉄道をつくるためにここに連れてこられたわけであ

る。

つまり鉄道建設のため、これに関連したすべての作業をやらなければならなかったのである。もちろん、ソ連側はそのような詳しい説明など表立っては何も話さなかったが、だれかが聞き出した情報が耳から耳へと伝わってきたのであろう。

それからこの鉄道の名称はバム鉄道というらしい。このようなことが次第にわかってきた。「バーアム」とはバイカル、アムールの略称で、アムール川のふちにあるコムソモリスクからバイカル湖の北辺を通って、シベリア鉄道の駅タイシェットまでを言う。

この地区名を五地区、またはフォルモリー地区といい、四つの支部にわかれていたらしいが、その全距離は相当なものであったであろう。コムソモリスクからの入り口付近は、鉄道の路盤はほぼ完成していた様子で、我々は最初から二支部に入ったように思う。

恐らく第二次大戦前までは、ソ連の囚人の収容所としてつくられたであろうが、戦争のため中止して、そのまま捨ててあったのであろう。屋根のないのやら、土台

の周りだけ終わったのがそのままになっていたのである。このようなところに放り出された我々は、到着と同時にまず自分の住む家を建てなければならなかったのである。その間、急造の天幕の中で、夜は着のみ着のまま、防寒帽子をかぶって隣の人と密着しながら横になったのだが、どうしても寒くて眠れない。仕方なくストロブの周りに来て、うとうととするのがせきの山であった。

その上に想像をはるかに超えた寒さである。だれも彼もが地獄の一丁目に放り出されたわけだ。かつては関東軍の精鋭として、一身をなげうって、あらゆる難関辛苦をも克服してきたはずなのに、事ここに至っては、その片鱗すらも見るができない。ただソ連の歩哨や監督に「ドバイ」「ブイストラ」「ドバイ、ドバイ」と追い立てられ、それに逆らうこともできず、夢遊病者のような毎日が続いた。

もちろんかろうじて生きていられる程度の最悪で多少の食糧の供給がこれに輪をかけたのである。零下三十度といえ、我々にして見れば、今までにまだ経験がないので全く驚いた。何か話そうと思っても口が全く回らな

いのである。言葉にならないのである。(なおその後零下四十八度という日があった。)それに常に注意していなければならぬのは凍傷で、お互いに前の人の鼻を見ながら仕事をし、白くなったらすぐに注意をし乾いた布等で血の通うまでこすらなければならぬ。決して温めたりそのまま放って置いてはいけないのである。

入ソ当時の冬はほとんどの人がこの凍傷にさんざんいためつけられた。でも休憩時間にはふんだんにあった木の枝や枯れ木を燃やして火にあたることができたので、せめてもの慰めであった。火を囲んでしばらくすると、寒さのためコチコチになっていた口も次第にゆるんで、いろいろな話が飛び出し、決まって第一番に出るのが帰る話である。寒さのため、港が凍結してしまったので春になって氷が解ければ、ダモイ(掃還)だと歩哨が言ったとか、作業監督が言ったとかである。次に出てくるのが食べる話で、さしずめ味の郷土自慢というところ……。

あべ川餅、ぼた餅、あんころ餅、だんごに大福、まんじゅうにどら焼きとか次から次へと際限がない。このよ

うな話で我々はどうにかあの苦難の道を生き抜くことができたのだと感ぜずにはいられない。やがて初年度の春が来て、短い夏も過ぎて、白樺の葉がヒラヒラと落ち始めても「ダモイ」は実現しなかった。そして作業にもなれたということがますますノルマを引き上げていったのではあるまいか。

このころどここの収容所にいたかははっきりと覚えていないが、山井戸掘りの経験が未だに鮮明な記憶となって残っている。これは作業現場が平地より次第に山地に移っていった結果、高い台地一帯に約十メートル間隔くらいに井戸くらの大きさの穴を掘り、深さも約十メートルくらいまでいろいろあるのだが、それを掘り上げて、その奥に一メートルくらいの横穴を掘りそこにダイナマイトを詰めてそれに導火索をつけて、さらに掘り上げた土をまた元の穴に埋め戻し、どの穴も一せいに点火爆破し、その岩盤を破碎する作業なのだが、この穴を掘るときのノルマがあまりにも高いため、いつも作業隊としての成績が五〇%しか上がらず、従ってソ連側はこのノルマの果たせない原因は、みんなが作業を怠けている

るからで、その帰結は当然皆が負わなければならぬといふのである。

つまり、「働かざる者食うべからず」、そして「報酬はその労働の量に依じて」といふのが社会主義の大原則であるから「お前たちに支給している食糧はそれなりに減らす」と言うのである。給与の詳細については、すでに忘れてしまったが、一日当たりの支給量、一〇〇%達成者が黒パン一日三百グラム、雑穀三百五十グラムをそれぞれ五十グラムずつ減らされ、パンは二百五十グラム、雑穀は三百グラム、雑穀は他の魚や油、少量の肉、野菜等と一緒に大釜でスープ状に煮つめたものを缶詰の缶一杯ずつ支給していたのを、その八分目というぐあいに減量するのである。労働に応じた支給が社会主義の原則だといつても、だれもことさらに怠けて仕事をしないのではない。いくら懸命にやっても、これに関係するいろいろな条件によって、それが万遍なく公平に進行するとは限らない。自分が当たった場所（穴）の岩質の状態——ツルハシだけで簡単にザクザクと掘れるところもあるし、石ノミとハンマーを使ってこつこつと頑張っても、いく

らも掘れないところ、あるいは作業中水が湧き出して、水の吸い上げに時間がかかってしまって、能率が上がらない等々……あるわけである。

従って、運がよければ割りのよい作業、運が悪ければこの井戸掘りのようなひどい作業に回ってしまうのである。それから一週間もたたないうちにその組の人たちはめっきりとやせてしまうことなのであり、従って体力の低下は即作業能率に影響するという悪循環になるのである。「泣き面に蜂」とはまさにこのことなのであるうか。

そこで一番問題になったのが、体の弱い人であり、四十歳にもなんんとする年老いた人たちである。極度の栄養失調に陥った彼らは、そこでだれ一人として親身の人にも見とられずに死んでいったのである。いつも何時も故郷の夢ばかりを見ながら凍土に埋もれていったのである。

戦後四十五年を経過した今、しばらく目を閉じて思うとき、当時精神的に打ちのめされ、それに加えて支給すべき食事の量まで加減されて強制労働に連日狩り出され

ていた当時の虜囚たち。ましてやそのために遠くシベリアの異郷に散った幾多の同胞を思うとき、まさに断腸の思いを禁じ得ない。そしてまたこれをシベリアの「悪夢」としてだけ片づけることはできない。

シベリアの思い出

熊本県 畑 中 眞 澄

復員して四十三年が過ぎ、抑留生活の体験を書くことになったが、改めて回顧するとき、ほうふつとして脳裏によみがえるものもあれば、記憶の定かでないものもある。抑留された場所や強制労働に従事した作業内容によって違いはあるが、捕虜としての生活はみな一緒であったと思う。

私たちが収容された場所は、シベリアでも東部の樺太に近いコムソモリスクとソフガワニとの中間のムーリ地区であった。いろいろの資料から二万人以上の抑留者がいたようである。

主に従事した作業は、シベリア鉄道の延長と複線化の仕事。将来、町になり、住民が生活する上に必要な水道の基幹の埋設であった。

シベリアでの生活は空腹と寒さ、そして過酷な労働と疲労の連続であった。アムール川の凍結期と解氷期には物資の輸送が途絶え極度の食糧不足に遭い苦しい目に遭った。

まず鉄道作業である。鉄道の路床をつくるため、山の崖を切り開く作業であるが、ツルハシとスコップの粗末なことにはまず驚いた。従って作業能率は上がらない。すべて作業にはノルマがあるから、それを達成しなければならぬのだ。監督はカンカンに怒って、声高にののしるが、ロシア語が全く通じないので、どうしようもない。通訳を呼んでもなかなか来ない。作業の手順、監督の意図するところの意思が通じ合わなくて大変困った。意思の疎通には言葉の果たす役割を痛切に感じた。意思の疎通がうまくいかずに、気短かな日本軍の将校が軍刀で切りつけた事件も起き、将校の軍刀の没収になった。

線路の路床に使うバラスおろしは夜間作業であった。